

# 教養教育段階における テストに関する授業開発と実践 -- 「テスト学教育」の効果測定 --

木村拓也(九州大学)

西郡 大(佐賀大学)

# はじめに

- テストに関する知識は、教員免許課程でも習得する機会がない
- ☞ 歴史的に教職教養の中で位置づけられてこなかった「教育測定」関係科目(木村2010)
- ☞ 柴山(1996), 松井・柴山(1997)の試みが唯一
  - 如何に, 教員養成課程の縛りの中でテスト学教育を行えるか
- ☞ 「テストの専門家」も、テストの専門知識は独学で学ぶ場合が多い(木村2010)
  
- 「テストの専門家」の就職先の1つとしてのアドミッションセンター
- ☞ 教養教育講義の担当が多い
- ☞ 教養教育段階での「テスト学」の授業開発を着想
- ほぼ同時期に, アドミッションセンターに着任した[アドミッションセンター第二世代]木村(2008~), 西郡(2009~)で協力して開発

# 「テスト学」の授業開発と受講者数

- 10年間(2008-2017)
- 木村9回(540名)
- 西郡4回(259名)の実施
- 計799名
- 時には、講義スライド・教材を共有
- 2016年に東北大学大学院(3名)
- 2017年に放送大学57名、九州大学で123名
- [現在]木村12回(723名)

表1. テスト関係学講義受講者数

	京大	長大	佐大	九大	年度計
2008	90				90
2009	87				87
2010	9*	24	77		110
2011		83	43		126
2012		102	86		188
2013			53	29	82
2014				92	92
2015				24	24
合計	186	209	259	145	799

\* 但し、この年度のみ教育学部専門科目「比較教育学講義-学力測定政策の日米比較」として開講した。

# 授業（京大、長大、九大）の内容

## 授業名:

京大「テストの科学とその歴史」

[学部専門]「比較教育学講義—学力測定政策の日米比較」

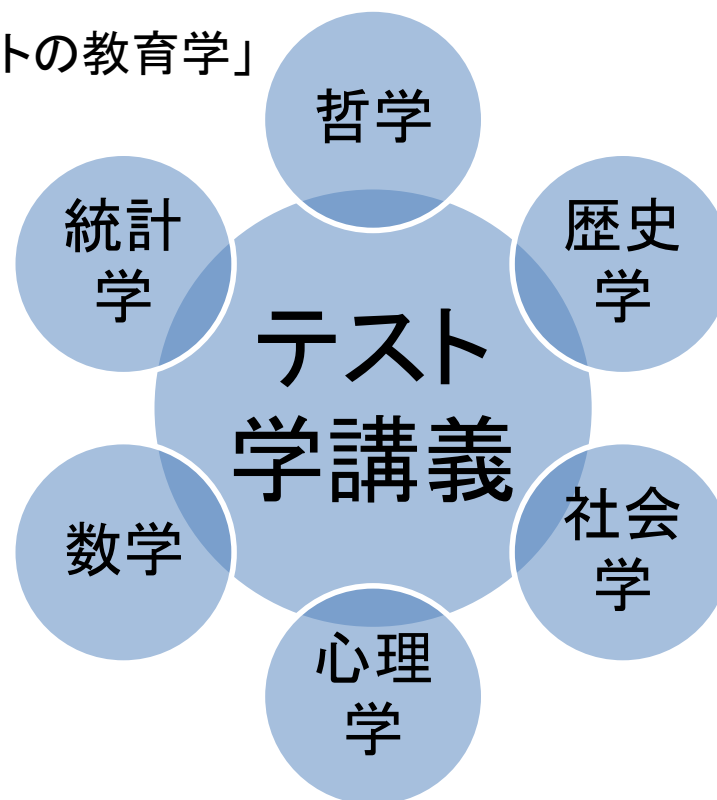
長大「社会と歴史—テストの科学とその歴史」

九大「テスト学への招待」「教育原論」、放送大「テストの教育学」

東北大院「教育テストング論研究演習」

教養教育として実施するために様々なディシプリンの視点

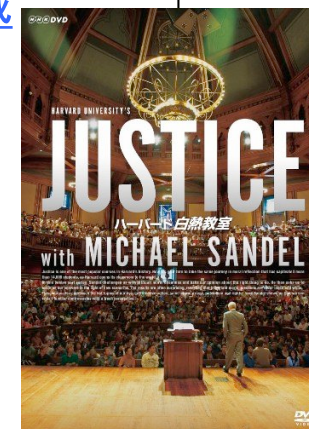
入学試験・就職試験・資格試験・昇格(昇任)試験等々, 人生において幾度も直面する「テスト」でありながら, 「テスト」に関する科学的な知識に接する機会は殆どない。そこで, 本講義では, 皆さんがいままで当たり前のように受けてきた「テスト」を哲学・歴史学・法律学・社会学・心理学・数学・統計学といった大学諸学問の観点から分析し, 更に, テスト理論と呼ばれるテスト評価測定技術についての導入的な解説を行う。「テスト」を単に「害悪」と捉えるのではなく, 「テストの結果が, 個人の処遇や人生を大きく左右するものであるが故に, その実施にあたっては, 細心の注意を払うべき類のものである」との認識に立って, よりよい「テスト」を実施していくための「基礎教養」の修得を目指す」



## 対象の学としての「テスト」

# 九州大学で実施した講義計画

- 第1回:オリエンテーション 青色は西郡と共通
- 第2回:テスト学の基礎ーテスト学の最前線, 暗黙のルール
- 第3回:テストの社会学ー学歴社会の理論, メリトクラシー論
- 第4回:テストの哲学(1)ーアファーマティブ・アクションの基礎知識
- 第5回:テストの哲学(2)ー正義論(社会哲学)から見たテスト
- 第6回:テストの心理学ー社会心理学から見た入試の公平感
- 第7回:テストの歴史学ー江戸時代の試験, SATの真実(NHK Special)
- 第8回:テストの法律学ー教育法体系における試験, 裁判事例
- 第9回:テストの数学ー合計得点・二段階選抜・合否決定
- 第10回:統計学の基礎(1)ー偏差値
- 第11回:統計学の基礎(2)ー相関係数
- 第12回:テストの統計学(1)ー項目分析と統計的方法
- 第13回:テストの統計学(2)ー信頼性・妥当性
- 第14回:テスト現場の実際(1)ー人事アセスメントの考え方
- 第15回:テスト現場の実際(2)ーM-1グランプリの信頼性
- 評価は全てレポート



これからの  
「正義」の  
話をしよう  
いまをJustice  
生き延びる  
ための哲学  
Michael J. Sandel 丸山 誠一  
マイケル・サンデル

# レポート1 (前半部分の講義に対応) 「テスト学の文献でレポート」

「テスト関係参考図書一覧から一冊を読んで、自らテーマを設定し論じる」こととする。どの本を読むかを迷ったら、『テストスタンダード』を読んで、従来の日本のテストと比較検討する」をレポートのテーマとしても良い(ただし、タイトルは自分で相応しいものをつけること)



文献リストを配布  
(約200冊程度記載)  
A4で6ページ  
HPでリスト公開中



## レポートタイトルの例

【2013年度:九州大学】  
バイト先の人事アセスメントのアセスメント  
教育の現場に立つ者から考える学習評価  
現代日本の本当に使える？心理テスト  
全国学力テストの必要性和今後のあり方について  
九州大学全学教育における選抜を目的とすることによるGPAの妥当性の変化  
D.アドキンス氏の『試験問題の作り方』を読んで  
センター試験(数学Ⅰ・A)は問題だらけ、格差社会への対応、  
本当の学力とは何か、教育と試験の制度化に至るまでの歴史  
現代の学歴社会と明治の試験制度  
ロールシャッハテストの歩み～これまでとこれから～  
入試数学作題、先入観とテスト、知能に影響を与えるもの  
今の大学入試の現状、試験と社会の上昇移動について

表13. 読書レポートの文献選択 (N=277)

順位	書誌情報	度数	割合
1	日本テスト学会 2007:『テスト・スタンダード—日本のテストの将来に向けて』金子書房.	55	22.1%
2	村上宣寛 2008:『心理テストはウソでした』講談社.	17	6.8%
3	日本テスト学会 2010:『見直そう、テストを支える基本の技術と教育』金子書房.	16	6.4%
4	天野郁夫 2007:『増補 試験の社会史』平凡社.	12	4.8%
5	吉川徹 2009:『学歴分断社会』ちくま新書.	10	4.0%
6	石川巧 2010:『「いい文章」ってなんだ?—入試作文・小論文の歴史』ちくま新書.	5	2.0%
7	尾木直樹 2009:『「全国学力テスト」はなぜダメなのか』岩波書店.	5	2.0%
8	荒井克広・倉元直樹編 2008:『全国学力調査』金子書房.	5	2.0%
9	刈谷剛彦 1995:『大衆教育社会のゆくえ』中公新書.	5	2.0%
10	松田薫 1991:『「血液型と性格」の社会史—血液型人類学の起源と展開』河出書房新社.	4	1.6%
	浜林正夫・深山正光・山口和孝 1998:『これでいいのか、大学入試』大月書店.	4	1.6%
	池田央 1992:『テストの科学—試験にかかわるすべての人に』日本文化科学社.	4	1.6%
	井上健治 1970:『テストの話』中公新書.	4	1.6%
	S.J.グールド 2008:『人間の測り間違い—差別の科学史 上・下』河出文庫.	4	1.6%
15	上野健爾・岡部恒治編 2005:『こんな入試になぜできない 大学入試「数学」の虚像と実像』日本評論社.	3	1.2%
	H.B.ライマン 1967:『テストの結果と解釈』日本文化科学社.	3	1.2%
	中井仁・伊藤卓編 2008:『検証「共通1次・センター試験」』大学教育出版.	3	1.2%
	D.アドキンス 1970『試験問題の作り方』日本文化科学社.	3	1.2%
	江利川春雄 2011:『受験英語と日本人—入試問題と参考書から見る英語学習史』研究社.	3	1.2%
	小林雅之 2008:『進学格差—深刻化する教育費負担』ちくま新書.	3	1.2%
	E.G.カーマイン・R.A.ツェラー 1983:『テストの信頼性と妥当性』朝倉書店.	3	1.2%
	イアン・ディアリ 2004:『知能』岩波書店.	3	1.2%
	安田亨 2003:『入試数学 伝説の良問 100』講談社.	3	1.2%

24	島田康行 2012:『「書ける」大学生に育てる—AO 入試現場からの提言』大修館書店.	2	0.8%
	L.J.カミン 1974=1997:『IQ の科学と政治』黎明書房.	2	0.8%
	野口裕之・大隅敦子 2014:『テストの基礎理論』研究社.	2	0.8%
	池田央 1978:『テストで能力がわかるか』日経新書.	2	0.8%
	J.M.ウッド他 2006:『ロールシャッハテストはまちがっている』北大路書房.	2	0.8%
	天野郁夫 2005:『学歴の社会史 教育と日本の近代』平凡社.	2	0.8%
	R.P.ドーア 1978:『学歴社会—新しい文明病』岩波現代選書.	2	0.8%
	芳沢光雄 2008:『出題者の心理からみた入試数学』ブルーバックス.	2	0.8%
	鎌原雅彦他 1998:『心理学マニュアル 質問紙法』北大路書房.	2	0.8%
	中井浩一 2007:『大学入試の戦後史 受験地獄から全入時代へ』中公新書.	2	0.8%
	日本教育心理学会編 1973:『大学入試を考える』金子書房.	2	0.8%
	日本教育学会入試制度研究委員会編 1983:『大学入試制度の教育学的研究』東京大学出版会.	2	0.8%
	櫻田大造 2013:『大学入試担当教員のぶっちゃけ話』中公新書ラクレ.	2	0.8%
	竹内洋 1995:『日本のメリトクラシー—構造と心性』東京大学出版会.	2	0.8%
	竹内洋 1991:『立志・苦学・出世—受験生の社会史』講談社.	2	0.8%

(1冊の書籍も含めれば、水準は79)

学生が読んだ文献リストからは学生のテストに対する興味を実に多少であることがわかる。

『テストスタンダード』や『見直そう、テストを支える基本の技術と教育』の売り上げに貢献？

# レポート2 (後半部分に対応) 「テスト分析に挑戦」

## 【概要】

次のテスト・データ(仮想、20人・10項目)を用いて、  
(1)項目分析、(2)信頼係数の推定(折半法、 $\alpha$ 係数)  
をエクセル上で実行し、どういうテストの性質を持っているか  
解釈をしなさい。



項目分析は、基本統計量、  
G-P分析、点双列相関係数、共分散比などを算出させる

折半法も奇遇法や統計的方法など選択肢は任せる。

スピアマン・ブランンの公式

キューダー & リチャードソンの公式

などを紹介

項目反応理論をしてくる学生も

Rの普及が貢献





# テスト観の変化を検証

- 初回と最後の授業においてweb調査を実施
- 実施年度: 2012年(長大)・2013年(九大)・2014年(九大)
- 履修登録者: 計223名
- 分析対象: 上に同じ

## 文理(長崎大)

文系	理系	教育(理)	環境科	医・医学	医・保健	歯学	工学部
0名	102名	2	1	4	4	2	89

## 文理(九大)

文系	理系	農学	芸工	経・経営	経・経工	教育	法
44名	73名	6	1	1	7	6	19
		文	医・医学	医・保健	理学	工学	
		12	2	1	25	25	

# テスト観の変化を検証—単純集計

- 「テストの印象」について、4件法で「非常に良い」「まあまあよい」「あまりよくない」「非常に悪い」を事前事後に問うた結果、189名中、**印象が向上したのは106名(56.1%)**。印象が低下したのは13名(6.9%)、印象が変化しなかったのは70名(37.0%)であった。

表6. 「テストの印象」の変化

		講義開始前の解答			
		非常に良い	まあまあよい	あまりよくない	非常に悪い
講義終了時の解答	非常に良い	4 (2.1%)	4 (2.1%)	11 (5.8%)	2 (1.1%)
	まあまあよい	2 (1.1%)	48 (25.4%)	<b>83 (43.9%)</b>	5 (2.7%)
	あまりよくない	0 (0.0%)	10 (5.3%)	18 (9.5%)	1 (0.5%)
	非常に悪い	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (0.5%)	0 (0.0%)

- 講義を通して、「**テスト観が変わった**」と回答したのは、187名中**174名(93.0%)**であった。

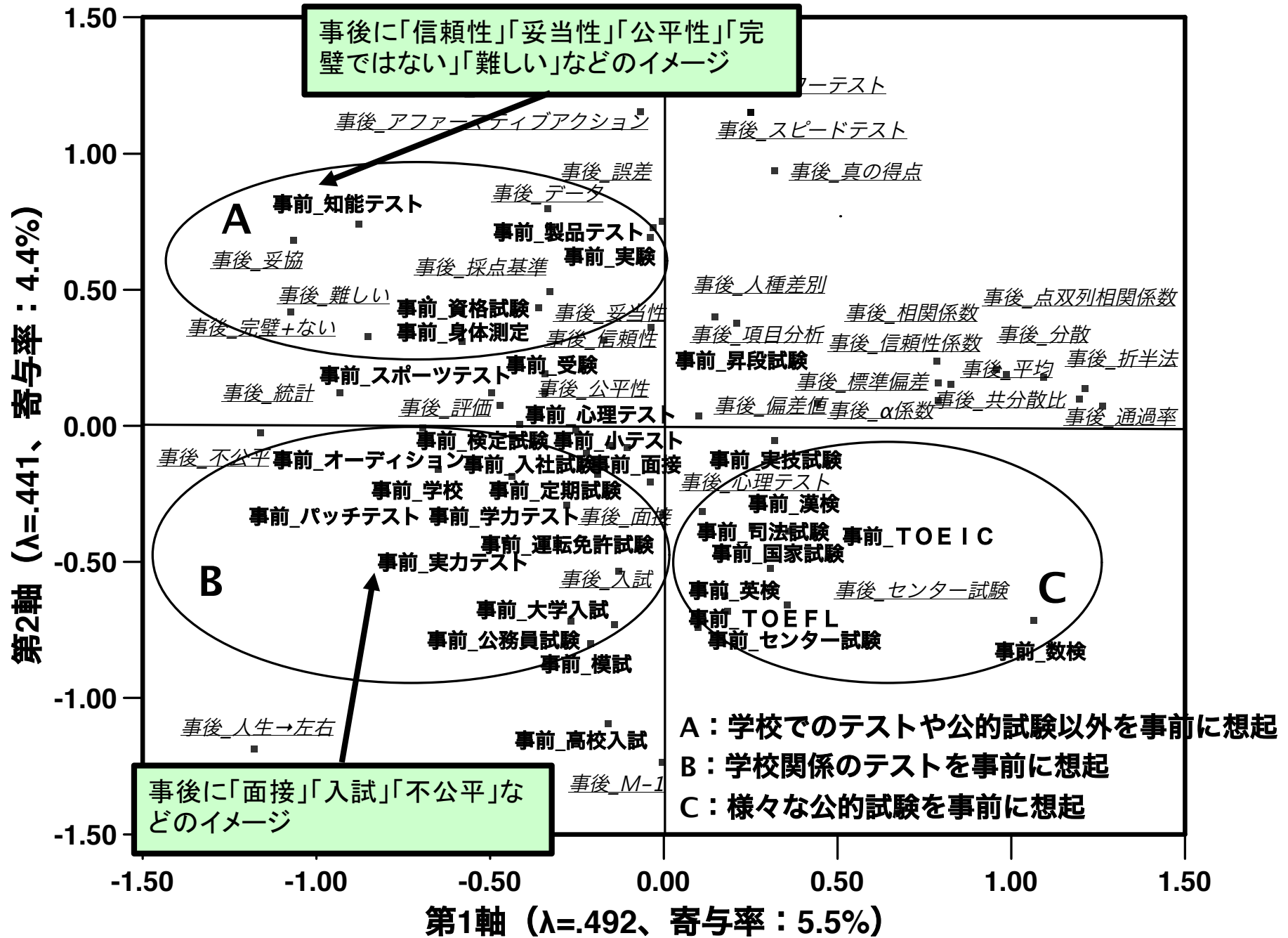


図1. 「テスト学教育」受講前後におけるテストイメージの変化

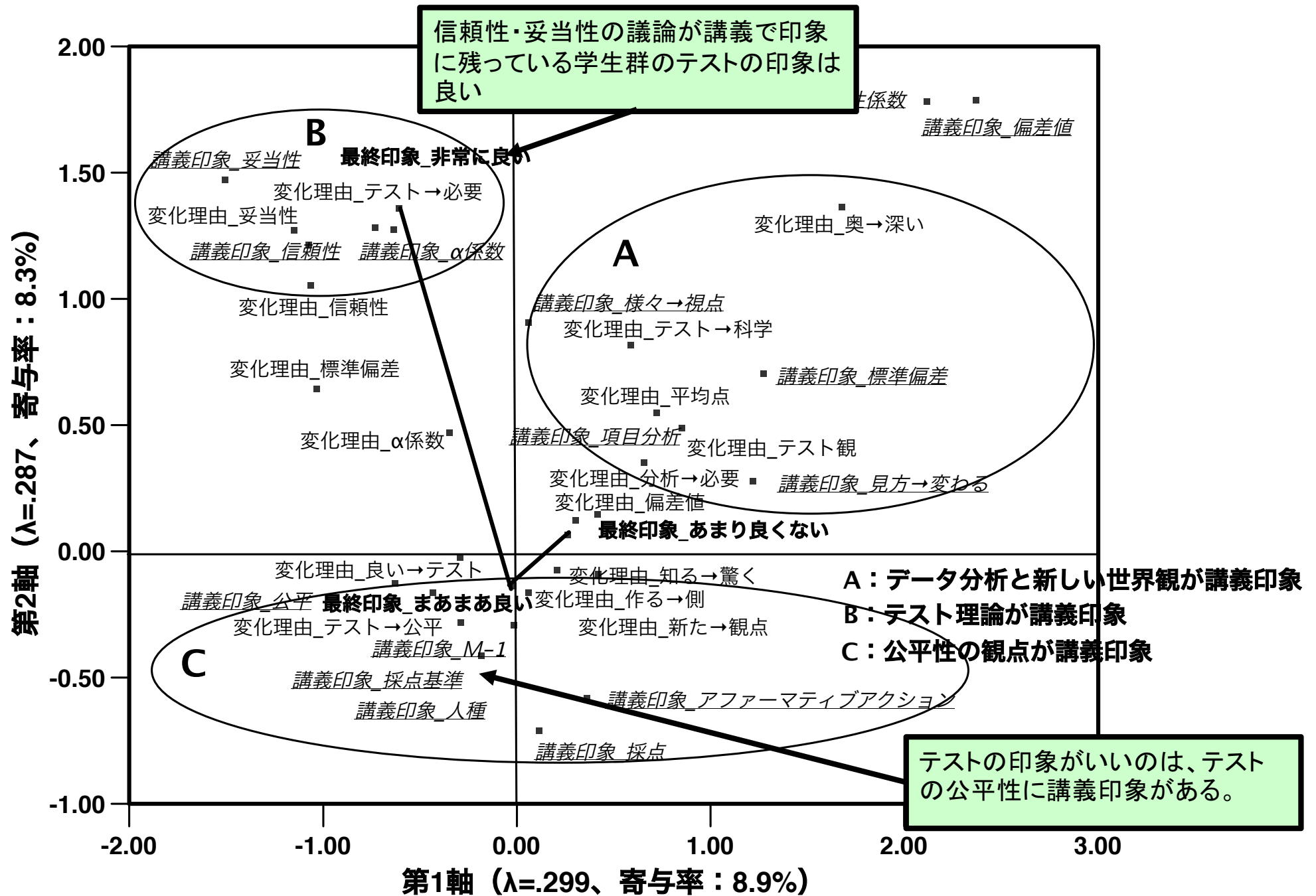


図2. 「テスト学教育」受講前後における「テスト観の変化理由」と「講義で印象に残ったこと」の関係性

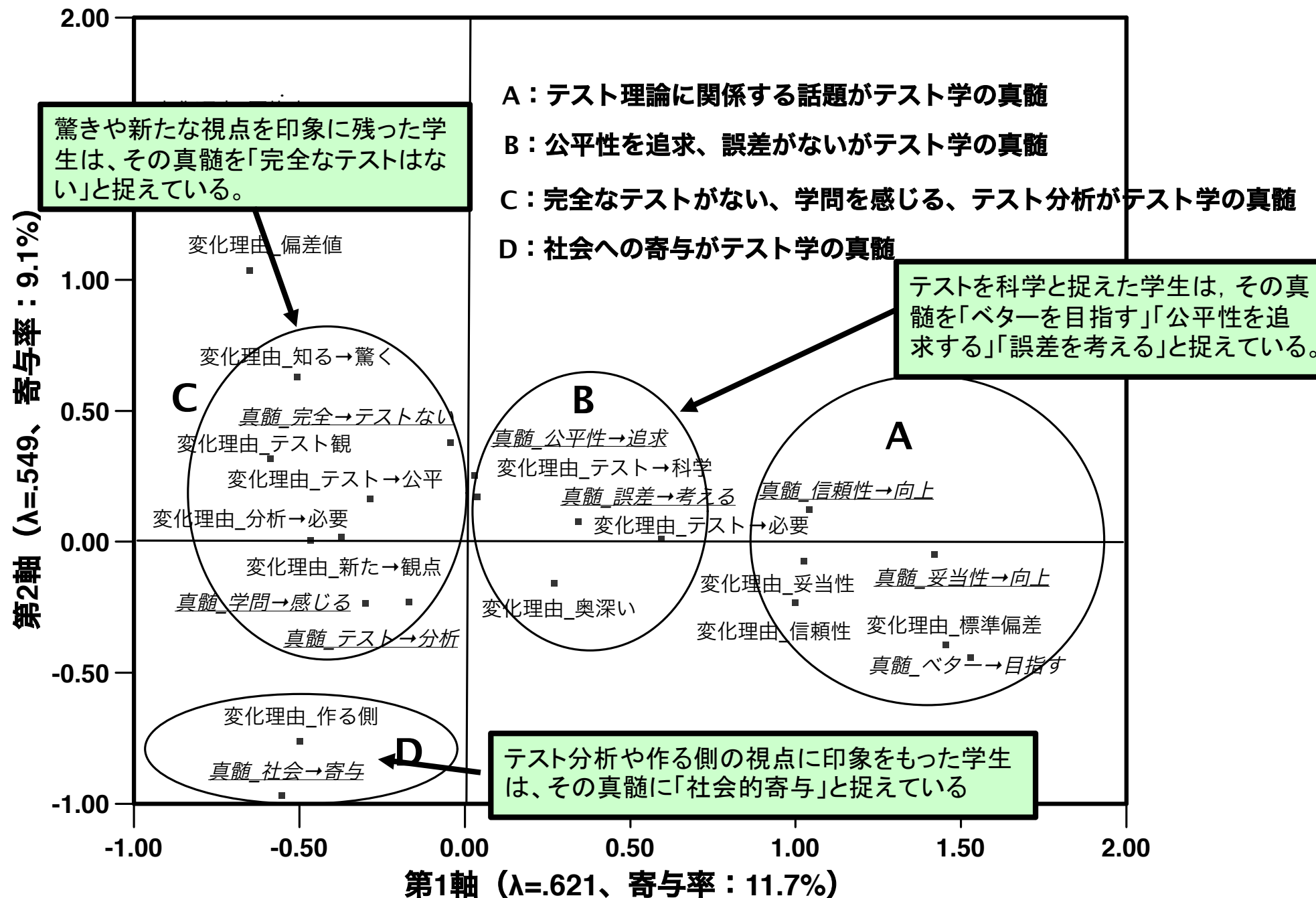


図3. 「テスト学教育」受講後における「テスト観」の変化理由と「テスト学」の真髓把握の関係

# 「テスト学」教育の得点分析(九大, N=121)

- 従属変数を講義成績(総得点, 読書レポート成績, データ演習レポート成績)にし, 独立変数をダミー変数として, 文理の別や, テキストマイニングで得られたカテゴリー(「事前印象」「事後印象」「変化理由」「真髓把握」)を投入して重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。

- 読書レポート(自由度調整済 $R^2=.256$ )

- 「真髓\_学問を感じる」( $\beta=.363^{***}$ )
- 「理系」( $\beta=-.245^{***}$ ),

テスト学に学問を感じた学生  
文系の学生

- データ演習レポート(自由度調整済 $R^2=.164$ )


- 「事前\_公平性」( $\beta=-.242^{**}$ )
- 「真髓\_ベターを目指す」( $\beta=.209^{**}$ ),

初回で公平性と言わない、  
ベストでなくベターを目指す  
学問と感じた学生

- 最終成績(自由度調整済 $R^2=.171$ )

- 「真髓\_学問を感じる」( $\beta=.312^{***}$ )
- 「真髓\_ベターを目指す」( $\beta=.248^{**}$ )

テスト学に学問を感じ、  
ベストでなくベターを目指す  
学問と感じた学生

-  学問としてテスト学を認識した学生の成績が高い傾向にあることが分かる。

# 授業で意識したこと（京大・長大・九大）

## ■ 「テストを科学する」という視点の強調

様々な場面で使われるテストの学問的側面を強調

⇒ 「受け手」の受動的態度から、科学的研究対象としての意識(能動的態度)への変化

## ■ 教養教育の講義としての設計

テストが(さまざまな)学問の対象であることを意識させる、テストの基礎教養

⇒ ディシプリンごとに研究の視点・力点が違う、そのこと自体の面白さ

## ■ レポートで文献購読とデータ分析の両方の体験してもらう

テスト学研究に触れる、古典的テスト理論の範囲内でのデータ分析

⇒ 前半の制度的社会的側面(文献)、古典的テスト理論の道具立てを試す

## ■ M-1グランプリのデータ分析をして、有用性を実感

項目分析や信頼性係数の推定をもらった最終回の講義で実施

⇒ 社会的な文脈と合わせてテスト理論の有用性を体感してもらう

# 授業（佐賀大学）の内容

教養教育として実施  
するために

**授業名:**教育の実際(テストを科学的に考える)

「大学生になるためには入学試験があり、大学の講義には試験があり、資格を取るためには資格試験、就職を希望するなら採用試験と、私たちは、何らかの形で『テスト』と関わりを持っている。しかし、人生において何度も直面する『テスト』でありながら、『テスト』そのものについて、十分に考える機会は多くはない。本講義では、『テスト』そのものを科学的に考え、現実的な場面における評価、選抜、試験などの本質に迫っていく」

テストの基礎



テストの科学  
～試験にかかわるすべての人に  
池田 央(著)

+

歴史的な観点

心理学的な観点

社会学的な観点

就職に関する事

身の周りのトピック



# 佐賀大学で実施した講義計画

- 第1回： 本講義で取り扱う「テスト」の定義 青色は木村と共通
- 第2回： テストが用いられる場面
- 第3回： 戦前と戦後の入試 -旧制高校の入試とは？-
- 第4回： アメリカの入試制度
- 第5回： 偏差値とは何か？基本的な統計指標
- 第6回： ペーパーテストを吟味する
- 第7回： テスト理論(古典的テスト理論, 項目反応理論)
- 第8回： 大規模調査を考える-全国学力調査を題材に-
- 第9回： 就職採用試験をテストの側面から考える
- 第10回： 面接試験を考える
- 第11回： 様々な誤差, 分析で知っておくべき統計的性質
- 第12回： 特別講義(M1グランプリを科学する:木村担当)
- 第13回： テスト・試験の公平性
- 第14回： 社会心理学からみる公平性 -個人の公正感とは？-
- 第15回： テストの設計に挑戦
- 定期試験

注目

# 「テストの設計に挑戦」とは？

【概要】身の回りにはない新たなテストを考える

- 背景と目的
- 測定内容:「何を測るのか」
- 対象者
- 測定方法
  - ⇒ 「信頼性」と「妥当性」を確保するための工夫も考えさせる
- 実施手続き



実現可能性を問わない自由な発想を期待するが、授業で触れたことを踏まえて作成することを指示。  
『テストスタンダード』も紹介

## 学生たちが考えたテスト

映像のめりこみ度テスト  
音色感受テスト  
就活の難易度判断テスト  
自粛ムード判定テスト  
女子力判定テスト  
鬼嫁判定テスト  
親バカ度判定テスト

# テストに対する意識の変化を検証

- 初回と最後の授業において質問紙調査を実施
- 実施年度: 2013年
- 履修登録者: 53名 (2年生以上)
- 分析対象: 両方の質問紙への回答者: 34名

性別

男性	女性
22名	12名

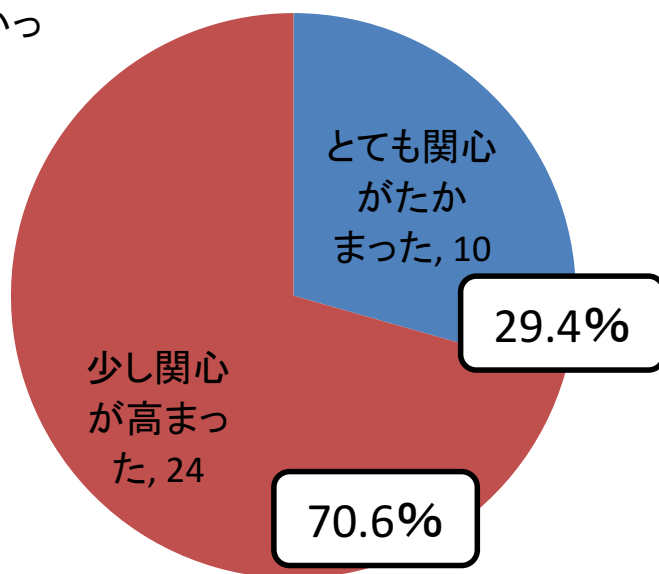
文化教育 学部	経済学部	理工学部	農学部
13名	6名	11名	4名

教員免許取得予定

取得予定である	取得しない
18名	16名

# 授業のテーマに対する関心の高まり

関心は高  
まらなかつ  
た, 0



教員免許	とても関心が高まった	少し関心が高まった
取得予定	5 (27.8%)	13 (72.2%)
予定なし	5 (31.3%)	11 (68.8%)

性別	とても関心が高まった	少し関心が高まった
男性	9 (59.1%)	13 (40.9%)
女性	1 (8.3%)	11 (91.7%)

# 受講前と受講後の意識の変化

質問項目	受講前	受講後	受講後- 受講前
自分が受ける「テスト得点」が何を意味しているのか	3.41	3.97	0.56*
自分が受ける「テスト得点」の信憑性	3.56	3.94	0.38
自分が受ける「テスト得点」に含まれているかもしれない「誤差」	3.29	3.50	0.21
自分が受けるテストがどのような目的で行われているか	3.41	4.03	0.62**
自分が受けるテストの種類や形式の特徴	3.38	3.82	0.44
様々なテストがどのような仕組みで「作成」されているのか	2.76	3.26	0.50
様々なテストがどのような仕組みで「実施」されているのか	2.38	3.44	1.06***
日本と外国におけるテストの違い	2.47	2.76	0.29
それぞれのテストが何を測っているか	2.97	3.85	0.88***
良いテストとは何か	2.85	3.53	0.68*

本講義では、「テスト」を以下のように定義します（してきました）。

**「能力、学力、性格、行動など個人や集団の特性を測定するための用具」**

※ 学力検査だけでなく、検定や資格試験、性格検査、アンケート等も該当します

# テストの作り手になったとき，どのような能力やスキル あるいは知識等が必要だと考えますか（共通項目）

受講前	受講後
<p>テストでみたいことを様々な角度から見極めることができて  <b>テストが測定技術だという認識</b>            学習指導要領を眺めたり，評価基準をしっかりと定めることができておかなければならない。</p>	<p>測りたい能力を測れるような問題を作る能力。            受験者の能力を正確に測る能力が必要である</p>
<p>学力を測る能力や，実生活に応用できるような問題を考  <b>難易度，受験者集団，細目積み上げ方式に関する認識</b>            測るのテスト</p>	<p>テストが難しすぎ，あるいは簡単すぎるものになってしまわないよう，受験者の実態に応じた難易度のテストを作ることができる能力            定期試験などではある單元だけから集中的に出すのではなく，全体から万遍なく出題し，解答者の理解度を測れるようなテスト設計をするなど。</p>
<p>テストによって測る特性に対して深い知識をもっている  <b>「信頼性」と「妥当性」という考え方</b>            文章能力を測るテストは何を測ることがテスト作りに欠かせないと思う。</p>	<p>テストの信頼性，妥当性についての知識            そのテストが本当に測りたいものを測れる構成になっているのかという考えとテストの「信頼性」と「妥当性」を知っていること。</p>
<p>テストの受け手が何を言いたいのか，何を考えているか  <b>「誤差」という表現</b>            テストについて必要</p>	<p>何を測定するのかをはっきりさせること。            信頼性や妥当性についての知識。            複数回，同じ試験を行っても誤差がほとんどないようなわかりやすいテストづくりが大事</p>

# 講義を終えて「テスト」についてどのような発見がありましたか？

「テスト=きれい」と思っていたのですが、講義を受けるうちにテストは奥が深いものだと感じた。
今まで受けてきたテストに完全なものはなく、それだけ欠陥のないテストを作ることは難しい。
これまで、テストの妥当性などを考えたことはなく、世の中で行われているテストはすべて正確に作られていて、正しいものなのだと思っていた。しかし、必ずしもそうではないことがわかり、これからは自分が受けるテストの信頼性や妥当性についても考えてみようと思った。
ダメなテストも世の中にはたくさんあることを知った。正確に能力を評価するテストは、作ることがとても大変だなと感じた。
テストには誤差が生じるものであり、テスト自体を完全に信頼しきるのは自分に不利益を生む可能性があること。
テストの意義について考えさせられた。そのテスト自体、どんな特質を持っており、どんな能力を試すのかなど考えたことがなかった。また、今まではただテストを受けていたが、少しテストを疑うことも考えるようになった。
テストの信頼性については今まで考えたことがなかった。妥当性については模試などでこの問題はおかしいのではないかと疑問に思ったことがあった。
テストは、今まで人と人との順位をつけるだけだと思っていたが、能力や性格などを測ったり、他に意味がたくさんあるとういことを知らされた。
テスト理論というジャンルがあることに驚きました。

# 授業で意識したこと

## ■ テストスタンダードの定義を前提

「能力、学力、性格、行動など個人や集団の特性を測定するための用具」

⇒ いわゆる学力検査を中心としたものが「テスト」という認識を改めたい

## ■ テストは、「技術」であるということ

⇒ 技術である以上、限界があるということを知ってほしい

⇒ 技術的観点から見た良いテストを知ってほしい

## ■ テストの作成・実施・検証という場があること

⇒ 受け手からはみえない「テスト」とは何かを知ってほしい

## ■ 「テスト」と「社会（実生活）」の関係

⇒ テストの本質を少しでも考えてほしい



# まとめーテストの啓蒙=テスト学教育

## ■ テスト学教育における教養教育段階の重要性

入試を経験した直後で「テスト」への関心の高い学生へのアクセス

## ■ テスト理論以外の入り口から「テスト学」に入る

専門科目ではなく、教養科目としての位置付け

⇒ テストの社会的背景、制度なども含めて関心を持ってもらう。

## ■ 選択科目であるが故に、理系学生が多い印象。

理学部数学科/物理学科の学生が熱い。全学学生対象の講義の重要性。

教職志望の学生が、教職教養科目以外に興味をもって選択してくれる

## ■ 「テスト」学研究に少しでも興味を持ってもらえたら

⇒ いつか講義を受けた学生が、テスト学関係者になってくれたら嬉しい

# 新たな展開(1) -- 学部教育・大学院教育

- 九州大学大学院 人間環境学府 教育システム専攻 教育計画・測定評価論研究室(M/D)
- 九州大学教育学部教育学系教育社会計画コース 教育計画・測定評価論研究室(B)

## 研究室の紹介

「教育計画・測定評価論」研究室（担当者：木村拓也、通称：計測研）は、原理論（歴史・制度を含む）、統計方法論、原理論と統計方法論を混合した実践編の3段階の体系的な領域を設定して、指導、演習を行って行きます。

- 「教育テスト原論」領域（学部では教育評価論）

「教育テスト/測定評価」に関する原理・歴史・政策制度を体系的に論じ、その限界と効用を踏まえながら、適切な「教育テスト/測定評価」を選択できる資質を習得する。

- 「教育行動計量学」領域（学部では教育統計学）

教育テストの分析方法，効果測定や追跡調査の方法論，教育調査における質問紙の設計と適切なサンプルサイズの設定方法，教育マクロデータを用いた地域移動や社会移動の計量分析など，様々な人間の教育行動を計量化する様々な統計的方法論を体系的に論じる。

- 「教育設計評価論」領域（学部では教育計画論）

教育のシステム・制度の評価アセスメントを巡る教育学的原理と統計的陥穽を体系的に論じ，教育システム・制度の計画・設計・評価の方法論を学ぶ。



# 新たな展開(2) --AOer養成講座

- 文部科学省教育関係利用拠点事業「九州大学次世代型大学教育開発センター」

文部科学省教育関係共同利用拠点事業

## アドミッション・スペシャリスト 能力開発研修会(第1回)

アドミッション・オフィサー養成講座を下記の日程で実施します。  
入試の専門知識を習得したい方の参加をお待ちしています。

2017年 **3月22日(水)・23日(木)** 九州大学 伊都キャンパス  
センター3号館 3105・3106号室(1F)

対象: 入試に関心のある大学教職員・高校教職員 定員: 40名

### スケジュール

3月22日(水)	3月23日(木)
13:00-14:30 <b>アドミッション・オフィサー入門</b> (佐賀大学 西部大 教授)	10:30-12:00 <b>総合的・多面的な評価の理論と実践</b> (九州大学 木村拓也 准教授)
14:50-16:20 <b>高大接続概論</b> (京都工芸繊維大学 山本以和子 准教授)	13:00-14:30 <b>大学入試における障害学生支援 —合理的配慮の考え方と支援の実態—</b> (大学入試センター 立脇洋介 助教)
16:40-18:10 <b>初級統計学—Excelでやってみる 入試データ分析入門</b> (九州大学 井半経子 准教授、佐藤喜一 教授)	※Excelの入ったPCをご持参ください

九州大学

応募〆切: 2017年3月14日(火)  
以下の情報をご記入のうえ、右記アドレスまでご連絡ください。  
(1)氏名(2)所属機関・部署(3)役職(4)参加動機(簡単に)  
(5)その他(一部の講義のみ聴講を希望される方は、その旨、お伝えください。)

問い合わせ先 申込先  
九州大学基幹教育院  
次世代型大学教育開発センター  
E-mail: kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp tel: 092-802-5831

文部科学省教育関係共同利用拠点事業

## アドミッション・スペシャリスト 能力開発研修会(第2回)

アドミッション・オフィサー養成講座を下記の日程で実施します。  
入試の専門知識を習得したい方の参加をお待ちしています。

2018年 **3月22日(水)・23日(金)** 九州大学 箱崎キャンパス  
(文系地区) 共通講義棟102教室

対象: 入試に関心のある大学教職員・高校教職員 定員: 80名

### スケジュール

3月22日(水)	3月23日(金)
13:00-14:30 <b>戦略的アドミッション・マーケティング入門</b> (京都工芸繊維大学 山本以和子 准教授)	10:30-12:00 <b>アドミッション・アンケートの設計</b> (九州大学 木村拓也 准教授)
14:50-16:20 <b>高校訪問における戦略的な入試広報について</b> (名古屋大学 永野拓矢 准教授)	13:00-14:30 <b>センター試験の受験生動向を探ろう!</b> (大学入試センター 内田照久 教授)
16:40-18:10 <b>アドミッション・オフィサーのための記述統計学</b> (九州大学 佐藤喜一 教授)	
18:10-20:00 <b>情報交換会</b> (会費4,000円予定)	

九州大学

応募〆切: 2018年3月14日(水) 17:00まで  
以下のホームページからお申し込みください。  
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/application/#form20180322>

問い合わせ先  
九州大学基幹教育院  
次世代型大学教育開発センター  
E-mail: kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp  
tel: 092-802-6070

# 新たな展開(3) -- 教職科目化

- 教職科目の再課程認定
- 教育職員免許法施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令(H29.11.17)

## 2 改正の要点

### (1) 教育職員免許法施行規則上の科目区分の大括り化

教育職員免許法上の科目区分が大括り化されたことに加え、教育職員免許法施行規則上の科目区分を以下のとおり大括り化すること。

#### ア 教諭の普通免許状について(第2条第1項の表、第3条第1項の表、第4条第1項の表、第5条第1項の表関係)

現行の8つの科目(①教科に関する科目②教科又は教職に関する科目(以上法律上の科目区分)③教職の意義等に関する科目④教育の基礎理論に関する科目⑤教育課程及び指導法に関する科目⑥生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目⑦教育実習⑧教職実践演習)を以下の5つの科目とする。

①教科及び教科の指導法に関する科目(幼稚園教諭の普通免許状の授与を受ける場合にあっては領域及び保育内容の指導法に関する科目)

②教育の基礎的理解に関する科目

③道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

④教育実践に関する科目

⑤大学が独自に設定する科目

九州大学では、2018(平成30)年度入学生から「教育テスト論」を教職科目「大学独自設定科目」に追加

**ご清聴有り難うございました**